

リベラルなヨーロッパの社会とその「敵」？

——「リベラル故の排外主義」の実証的検証——

J200322

馬場 慎太郎

I. はじめに

2023年11月22日、オランダにて下院総選挙の投開票が行われた。目下の注目はヘルト・ウィルダース(Greet Wilders)と彼の率いるオランダ自由党(Partij voor de Vrijheid, VPP)であった。ウィルダースはイスラーム批判に基づく反移民的姿勢とポピュリスト的発言からオランダのトランプと称される政治家である(『TIME』2017.3.10)。11月22日時点の開票予測に時点で自由党は第1党なる見込みであり、この結果は欧州に吹き荒れる排外主義ポピュリズムの風潮をさらに加速させるものとなるだろう(『BCC NEWS JAPAN』2023.11.24)。

ウィルダースの主張で注目すべきは反イスラーム・反移民とそのロジックである。ウィルダースはイスラームの教えを非リベラルかつ後進的であるとみなし、ムスリム移民をテロの温床であると決めつけるような姿勢をとる。そして、リベラルなオランダやヨーロッパの社会を、非リベラルなイスラームとムスリム移民から保護する建前で反移民を唱える。このようなリベラルな価値観に基づく排外主義というロジックは、一見矛盾するかのように見えるが、近年はウィルダースをはじめとする排外主義的ポピュリストのロジックとしてしばしば採用される(水島 2016: 105)。

本研究の目標は、リベラルと排外主義が結びつく「リベラル故の排外主義」が有権者の間でどれほど一般的な考え方であるのかを把握することである。ポピュリストが主張する一見矛盾するようなロジックがどれほど有権者の、特にポピュリストを支持する有権者の価値観の傾向を説明するのかを実証的に明らかにしたい。

かつて、カール・ポパーは主著である『開かれた社会とその敵』の中で「寛容のパラドックス」という有名なパラドックスに言及した。無制限に寛容な社会は不寛容さにさえ寛容であるがゆえに、不寛容によって寛容さが蹂躪され必然的に不寛容な社会へと変貌してしまうというパラドックスである。(ポパー 2023b: 258)¹。このパラドックスによって指摘されるのは、寛容さに内在する矛盾についてである。

寛容のパラドックスが指し示す矛盾は、今日の排外主義的ポピュリストによる「リベラル

故の排外主義」のロジックとも重なる部分がある。排外主義的ポピュリストは特にイスラームの教えを非リベラルで後進的のものであると主張する。そして、イスラームをリベラルな自国の社会やヨーロッパの社会における不倶戴天の敵であるかのように訴え、リベラルな社会の防衛を建前に移民や難民を非難する。例えば、ウィルダースはイスラームを「全体主義的イデオロギー」とみなしモスクの閉鎖や公共の場における女性のスカーフの禁止、イスラーム諸国からの移民や難民の拒絶を訴えた(『TIME』2017.3.10)。さらに、イスラームの聖典である『クルアーン』をイスラーム版『我が闘争』と称し禁止を呼びかける(水島 2016: 122)²。

ポパーは『開かれた社会とその敵』のドイツ語版第7版の序文において、本書の執筆を全体主義との戦いであると位置付けた(ポパー 2023a: 13p)。ウィルダースもまた、寛容なオランダを不寛容なイスラームから擁護することを訴える(水島 2016: 122)。不寛容から寛容を守る戦い、全体主義から自由でリベラルな社会を守る戦いという構図が、不寛容で非リベラルな者たちを排除することを建前とした排外主義的ポピュリストによって再び掘り起こされたかのようなのである。

しかし、ポピュリズムはその性質からして自由主義を掘り崩し、民主主義の後退させる恐れがある。(ミュラー 2017: 5-9)。先鋭化する「リベラル故の排外主義」がポピュリストによる自由民主主義の後退を引き起こす可能性は十分にあると言えるだろう。そうなった場合にはリベラル社会・寛容な社会にとっての本当の敵とは「リベラル故の排外主義」を唱えるポピュリズムである。

こうしたポピュリズムと排外主義を巡る近年のヨーロッパ政治の動向を把握し、民主主義の明日を考える上で、本研究が目指すポピュリズムの需要側における価値観の実態を明らかにする試みは大きな意味を持ち得るだろう。

本稿の構成は以下の通りである。まず2章にてヨーロッパにおけるポピュリズムと排外主義の状況を概観し、「リベラル故の排外主義」のロジックについて説明する。3章では本研究におけるリサーチクエスチョンを確認する。続く4章では実際に使用するデータセットと変数について確認し、リサーチクエスチョンに則った仮説を導く。5章では分析結果を提示し仮説の妥当性を検討する。6章では分析結果を踏まえた結論をまとめ、考察を行う。

II.ポピュリズムと、ヨーロッパにおける「リベラル故の排外主義」のロジック

(1)ポピュリズムとは

近年話題を呼んだドナルド・トランプの登場やイギリスの国民投票によるブレグジットと共に、ポピュリズムという政治学上の概念が改めて注目を浴びている。特にヨーロッパにおいてポピュリスト政党が台頭し主流化してきている(水島ら 2020:2-3)。近年のヨーロッパのポピュリズム傾向は移民排斥を唱える傾向にある(ミュデ・カルトワッセル 2018: 57)。そ

うした移民排外主義のロジックの一つとして「リベラル故の排外主義」が挙げられる。

ポピュリズム概念の整理したものとして著名なものはミュデのイデオロギーとしてのポピュリズムである。ミュデの定義を用いることで時代や地域で様々な特色を持つポピュリズムを包括的に捉えることが出来る。また、政治家の特徴だけでなく需要サイドのポピュリズム的傾向を捉えることに適しており、実証研究において広く採用される定義である(松谷 2022: 5-7)。

ミュデの定義によるとポピュリズムは人民、エリートおよび一般的意思の3つの中核概念から構成される。ポピュリズムは「我々、汚れなき人民」と「奴ら、腐敗したエリート」というマニ教的善悪二元論で世界を捉える。そして我々人民には単一の一般意思が存在しており、ポピュリストはそれを実現させることを訴える。さらにポピュリズムの特徴としては中心が薄弱であることが挙げられる。中心の薄弱さゆえにポピュリズムは単体で現れるイデオロギーではなく、中心の強固なイデオロギーと結び付き現れる。それゆえポピュリズムは多種多様な形態をとる(ミュデ・カルトワッセル 2018: 13-35)。

こうした特徴を持つポピュリズムは、近年ヨーロッパにおける反移民的態度と結びついて存在感を増している。

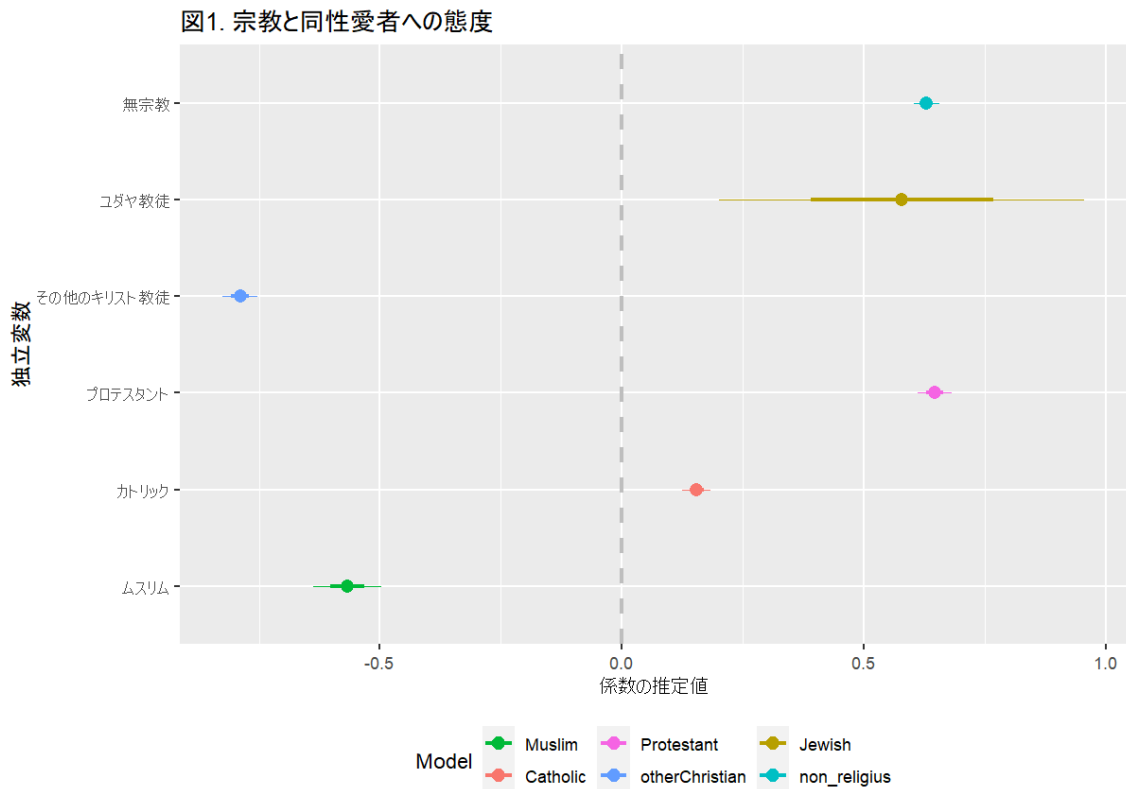
(2) 「リベラル故の排外主義」とは

ヨーロッパにおける排外主義の背景として、イスラームやムスリム移民との価値観の衝突が挙げられる。例えば、欧州難民危機が生じた2015年のドイツやオーストリアは、シリア内戦から逃れてきた難民に対して非常に寛大であった。しかし、その1年後にはその寛大さは影を潜めた。寛大に受け入れきた難民こそが、ヨーロッパの福祉モデルやリベラルな社会を破壊するだろうという不安に駆られたが故の結果である(クラステフ 2018: 45)。リベラルなヨーロッパが移民によって破壊されるという不安が、今日の排外主義ポピュリストの台頭の背景の1つとしてある。

イスラームとリベラルな価値観の衝突を巡る様々なトピックの中では、同性愛者をはじめとする性的マイノリティーへの態度に関するものが象徴的である。イスラーム思想研究者の飯山陽によると、近年のイスラーム諸国では近代化が進み女性の権利は拡張している反面、同性愛者やLGBTQI+などの性的マイノリティーの権利に関しては未だ抑圧的である。イスラームの聖典である『クルアーン』では同性愛行為を厳しく咎めており³、大半のイスラーム諸国では同性愛行為を禁止する。また、イスラーム諸国からすれば西洋諸国が掲げるリベラルな価値観や多様性擁護の価値観は、それ自体が特殊な立場によるイデオロギーであるとの見方もされる⁴。権利と自由の促進を口実に性的マイノリティーの合法化を強いることは、西洋文化によるイスラーム諸国の文化や価値観に対する侵略であると捉えられる。このような事情がイスラーム諸国の同性愛嫌悪の背景であるとされる(飯山 2022)。

図1はヨーロッパの主要宗教・宗派の信者が示す同性愛者への寛容さを示したものであ

る⁵。同性愛者への寛容さを従属変数に回答者の宗教・宗派のダミー変数を置き回帰分析を行った。結果は、やはりムスリムの係数はマイナスを示しており、イスラームは信者個人のレベルで同性愛者に対して他の宗教宗派と比べて相対的に不寛容であることを示している⁶。



このようなイスラームに対するイメージと事実が、リベラルを自認しリベラルであることにアイデンティティを見出すヨーロッパ人からの非難に晒されるのだろう。同性愛者を巡る衝突だけでなく、女性の公共に場におけるスカーフや表現の自由とテロなど、象徴的な事件は数多い。女性のスカーフのように目立つ象徴はそれを見たヨーロッパ人の価値観を映し出し自らに自覚させる鏡となりうる。「抑圧的」なスカーフが我々のリベラルなヨーロッパ社会を侵害としているとみなされたとき、イスラームをリベラルな公共の領域から追放すべきだという要求が出て不思議ではない(ヨブケ 2015: 4-5)。2005年のデンマークのある新聞社が掲載したムハンマド風刺漫画に対するイスラーム側の抗議テロは、イスラームは表現に対してテロでもって対抗する宗教であるとの認識がデンマークで広まった。そして、のちに台頭するデンマーク国民党によるイスラーム批判(イスラームにおける女性差別や「全体主義」の糾弾)が広く支持されることになる(水島 2016:111-112)。

オランダでは、ピム・フォルタインという政治家がイスラームは遅れた宗教であり、西洋文明とは共存不可能であると主張し、その主張は広く支持を得た。彼はあくまで同性愛者の

権利や男女平等、自由・人権といった近代的価値観からイスラームを批判する(水島 2019: 127-131)。典型的な「リベラル故の排外主義」と言えよう。そして、今日オランダでもっとも注目を浴びる政治家のヘルト・ウィルダースも、イスラームを後進的で全体主義的とし、特に民主主義と相容れないものであると批判する。こうした「啓蒙主義的排外主義」がフォルタインやウィルダースによって展開される(水島 2016:193-199)。

このように「リベラル故の排外主義」とは、ウィルダースに代表されるようなリベラルな価値観に根をおく排外主義である。同性愛者の権利や男女平等といった一見寛容な価値観を擁護する者が、それを受け入れないイスラームやムスリム移民に対して不寛容に振舞うのである。

III. リサーチクエスチョン

本研究の目的は、ポピュリストによる「リベラル故の排外主義」のロジックは有権者の間においてどれほど一般的な考え方であるのか、この問いに答えることである。

リベラルとは、社会において多様な価値観を認め個人が自らの生き方を自由に選択し、幸福や人生の目標を追求する権利があるという立場である(田中 2020: 7)。リベラルの立場において社会とは、多様な価値観や宗教、アイデンティティからなる多元的なものである。そして、このような社会における多様性を平和裏に管理するために、リベラルは最も基本的な原則として「寛容さ」を置く(フクヤマ 2023: 24-25)。そのような前提において、リベラルな価値観に基づき排外主義を主張する「リベラル故の排外主義」のロジックには違和感を覚えざるを得ない。「リベラル故の排外主義」は政治家個人による排外主義のロジックのあり方としては理解できないでもない。しかし、その政治家を支持する有権者の排外主義的意識一般が「リベラル故の排外主義」の論理に基づいているものなのかは、政治家の主張を解釈しただけでは推し量ることはできない。

そこで、本研究ではポピュリスト政党支持者が実際に排外主義的なのか、そしてその排外主義はポピュリストが主張するようにリベラルな価値観に基づくものなのかを実証的に検証し、有権者の価値観の実態を明らかにすることを試みる。

IV. 仮説と分析方法

(1) 変数の説明

本研究では主に世論調査データである European Social Survey (ESS)の第9回調査データ

(ESS9)と政党のイデオロギーやポピュリズム的傾向の調査データである Global Party Survey (GPS)の2020年調査データを用いる。

有権者の「リベラル故の排外主義」的な傾向の実態についての仮説を設けて分析を進めるためには、有権者のリベラル的傾向と排外主義的傾向を測定し観察する必要がある。しかし、有権者が持つこれらの価値観の傾向を直接観察することは難しい。例えば、リベラルな価値観と多文化主義的な価値観とが、強い相関関係にあることを示す研究もある(Breidahl et al 2017)。つまり測定方法や価値観の解釈によっては、「リベラルであること」は多文化主義的であると、すなわち「排外主義的でないこと」とする見方もある。本研究における目標は「リベラル」であるが故の「排外主義」の観測を試みることである。したがって「リベラルであること」と「排外主義的であること」が矛盾しないように変数を操作しなくてはならない。

そこで「リベラル的傾向」と「排外主義的傾向」という二つの概念の双方に代替となる変数を設定し、これら进行操作する。

まず、リベラル的傾向の代替変数として、「同性愛者への寛容さ」⁷を用いる。リベラルが擁護する包括的性や多様性には社会的マイノリティーに対する寛容さが想定される。また、リベラル派は伝統的に性的マイノリティーの開放や同性婚合法化などを掲げてきた。リベラル派の伝統には同性愛者を含む社会的マイノリティーの擁護の価値観が含まれている(サリヴァン、2015:174-175)。⁸したがってリベラルであることの代替変数として、同性愛者への寛容であることを用いることは妥当であろう。また、マイノリティーを擁護するリベラルな有権者が、同じマイノリティーでも同性愛者には寛容でありイスラームや移民には不寛容でありえるか、という本研究の問いにも即している。

反イスラーム・排外主義的傾向の代替変数として「ヨーロッパ外の貧しい国からの移民への態度」⁹を用いる。イスラームはウィルダースのようなポピュリストによってリベラルな社会の敵であるとされた。単なる移民や外国人ではなく、ヨーロッパ外からの移民としたのは、「リベラル故の排外主義」の標的は「非リベラル」と見做されるイスラームだからである。

さらに本研究では、GPS データセットより回答者の支持政党の属性を把握し、分析対象に含める。¹⁰「リベラル故の排外主義」はポピュリスト政治家や特定のイデオロギーに特有なものである可能性がある。有権者の価値観の在り方と支持する政党のタイプがどのような関係にあるのかも検証の対象としたい。

(2) 分析方法

本研究では、最小二乗法(OLS)による回帰分析を行う。従属変数に反移民的態度を置き、独立変数との関係を観察する。独立変数は同性愛者への態度、前回選挙で投票した政党のポピュリズム的傾向、前回選挙で投票した政党の経済的イデオロギー¹¹である。同性愛者への態度と反移民的傾向の相関関係に対して、支持政党のタイプによってどのような影響を及

ぼすのかを観察するために、回答者の同性愛者への態度と支持政党のポピュリスト的傾向と経済的イデオロギーの交差項を用いる。また、統制変数として教育水準(ISCED のレベル)と年齢、性別(女性かどうか)、宗教(イスラーム教徒かどうか)を回帰分析に含める¹²。

(3) 仮説

まず、有権者全般の「リベラル故の排外主義」の実態を調査する。先ほど説明した通り「リベラルであること」を「同性愛者に寛容であること」でもって代替する。「リベラル故の排外主義」が社会において広く見られる価値観傾向であるならば次の仮説 1 が支持されるはずである。

仮説 1 : 「同性愛者に寛容であれば、反移民的になる」

先述したように、ヘルト・ウィルダースはポピュリスト政治家であるとされる。彼が党首を務めるオランダ自由党も GPS による評価では 4 段階評価でもっともポピュリスト的である 4 が与えられている。また、ここまで示したようにウィルダースは「リベラル故の排外主義」の典型的例であるとされる。ウィルダースのような政治家が「リベラル故の排外主義」の典型であるならば、「リベラル故の排外主義」は主にポピュリスト政治家によって強調されるロジックであるといえよう。さらに、近年のヨーロッパにおけるポピュリストの台頭は、反移民政策との関連が強い。それゆえに反移民政策及びに、そのロジックの 1 つである「リベラル故の排外主義」はポピュリスト政治家に特殊なロジックである可能性が高い。したがって、ポピュリスト政党の支持者であるかどうかを分析に含めるべきである。「リベラル故の排外主義」がポピュリストに特殊なロジックであるなら、ポピュリストを支持する有権者にこそ「リベラル故の排外主義」が観察されるはずである。そのことを踏まえて次の仮説を検証する。

仮説 2 : 「ポピュリスト政党の支持者が、同性愛者に寛容であれば、反移民的になる」

また、ポピュリズムの需要サイドにおける「リベラル故の排外主義」が存在したとしても、そうした傾向を持つ人々が少数ならば観察対象の全体的傾向に飲み込まれてしまい、検出できない可能性がある。そこで観察する国家と支持政党を絞って分析を行う。一例を挙げると、オランダ自由党とデンマーク国民党が「リベラル故の排外主義」の代表格とされている(水島 2016: 103)。もしヨーロッパ全体の傾向と、特定の国や特定の政治アクターの間の観察結果にギャップがあるならば、「リベラル故の排外主義」はヨーロッパのポピュリストとその支持者に一般的な現象とはみなせない。むしろ、特定の国や特定の状況に置かれた有権者に見られるものであると考えるべきである。そのことを踏まえ、本研究ではオランダ自由

党とデンマーク国民党を分析の対象に含めた2つの仮説も検証する。

仮説 3a : 「オランダ自由党支持者は、同性愛者に寛容であると、反移民的になる。」

仮説 3b : 「デンマーク国民党支持者は、同性愛者に寛容であると、反移民的になる。」

本研究では、以上の4つの仮説を検討する。

V. 分析結果

回帰分析の結果は図2と図3で確認できる。これらの図は独立変数と従属変数の相関係数を可視化したものである。横軸が相関係数を表しており、独立変数の点が行くほど強い正の相関がある。逆に左に行けば負の相関が示される。係数0を跨ぐと正負関係は逆転する。交差項は「×」で表されている独立変数である。同じモデル(同じ色の独立変数)で、交差項を含まない独立変数の係数と交差を含む独立変数の係数の違いを確認することで、交差項の影響(ここでは、同性愛者への態度)を確認することが出来る。

仮説1の結果は図2¹³のモデルA1によって示される。独立変数(9)を見ると同性愛者への寛容さは反移民的傾向と統計的に有意な負の相関関係にあり仮説1は棄却される。¹⁴やはり性的マイノリティーに寛容な者は、移民に対しても寛容になることが示される。有権者全体の傾向としての「リベラル故の排外主義」は確認されない。

次に仮説2の妥当性を検討する。仮説2はモデルA2とモデルA3にて確認できる。モデルA2は右派ポピュリスト政党支持との交差項を含み、モデルA3は左派ポピュリスト政党支持との交差項を含む。右派ポピュリスト支持(8)と左派ポピュリスト支持(6)に共通の傾向としてはポピュリスト政党支持と反移民的傾向は統計的に有意な正の相関関係にあることである。右派であろうと左派であろうと関係なく、ポピュリスト政党支持者は反移民的であることが示された。また、ポピュリスト政党支持と同性愛者への態度の交差項(5)(7)を見ると、右派と左派の両者ともに反移民的が緩和されていることが分かる。これは、ポピュリスト政党支持による反移民的な傾向が、同性愛者に寛容であれば緩和されることを表している。特に左派ポピュリスト政党支持者に限れば、交差項の係数(5)はマイナスを示しており、左派ポピュリスト支持者でも同性愛者に寛容なものは移民にも寛容になることを表している。この結果は仮説2の想定とは逆であり、「リベラル故の排外主義」はポピュリスト政党支持者において一般的な傾向ではないことが分かった。同性愛者への寛容さによって代替されるリベラルな価値観が排外主義的傾向を緩和していることが示される結果となった。

さらに興味深い結果が得られたのは非ポピュリスト政党支持者においてである。モデルA4、モデルA5はそれぞれ非ポピュリスト右派と非ポピュリスト左派の結果である。両者(2)(4)ともに移民には寛容であることが分かる。しかし、同性愛者への寛容さの交差項(1)(3)を見

ると、移民への態度が悪化する。特に非ポピュリスト右派政党支持者(4)に至っては係数がマイナスからプラスへと逆転する。これは、非ポピュリスト政党支持者は同性愛者に寛容であれば移民に対して不寛容になることを表している。つまり、ここではじめて「リベラル故の排外主義」の存在が実証的に確認された。非ポピュリスト左派(1)に関しても交差項の係数は依然としてマイナスでありながらも 0 に接近している。同性愛者に寛容な非ポピュリスト左派政党支持者は、同性愛者に寛容でない非ポピュリスト左派政党支持者に比べて、移民を嫌悪する傾向がある。このことから、非ポピュリスト政党支持者にこそ「リベラル故の排外主義」の考え方が一般的な考え方である可能性が示唆される。

仮説 3a と仮説 3b の結果は図 3¹⁵で示されている。オランダ自由党支持者(3)(4)に関してサンプルサイズ十分でないため統計的に有意な結果は得られない。しかし、同性愛者への寛容さの交差項(3)を見ると、結果の差はあまり無いように見える。強く断言は出来ないが、同性愛者への寛容さは排外主義的傾向への影響は無いことが示唆される。したがって仮説 3a は支持されない。

また、デンマーク国民党支持者(1)(2)の結果もやはり統計的に有意ではない。同性愛者への寛容さとの交差項(1)と比較すると、若干交差項の方が移民受け入れへの態度が軟化している。よって、こちらも結果も強く断言はできないが同性愛者への寛容さが排外主義を和らげているように見える。したがって仮説 3b も棄却される。オランダ自由党支持者とデンマーク国民党支持者はともに「リベラル故の排外主義」の傾向は強くないと考えられる。

そして、自由党支持しないオランダ人(8)は移民受け入れへ肯定的であるが、同性愛者への寛容さとの交差項(7)では係数がプラスに転じ移民受け入れに否定的になる。自由党支持者以外では「リベラル故の排外主義」が確認される。ウィルダースのロジックは自由党支持者には受け入れられず、自由党支持者以外において観察される。このことは、当初の予測とは全く反対の結果であり非常に興味深い。

図2. 移民受け入れに対する態度

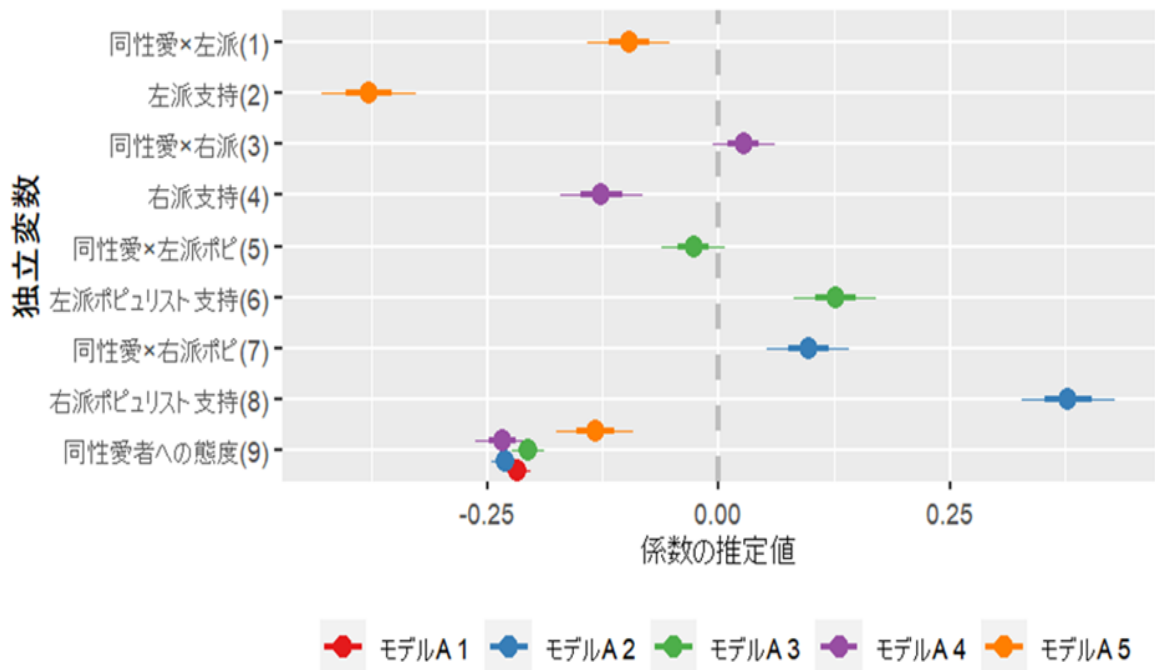
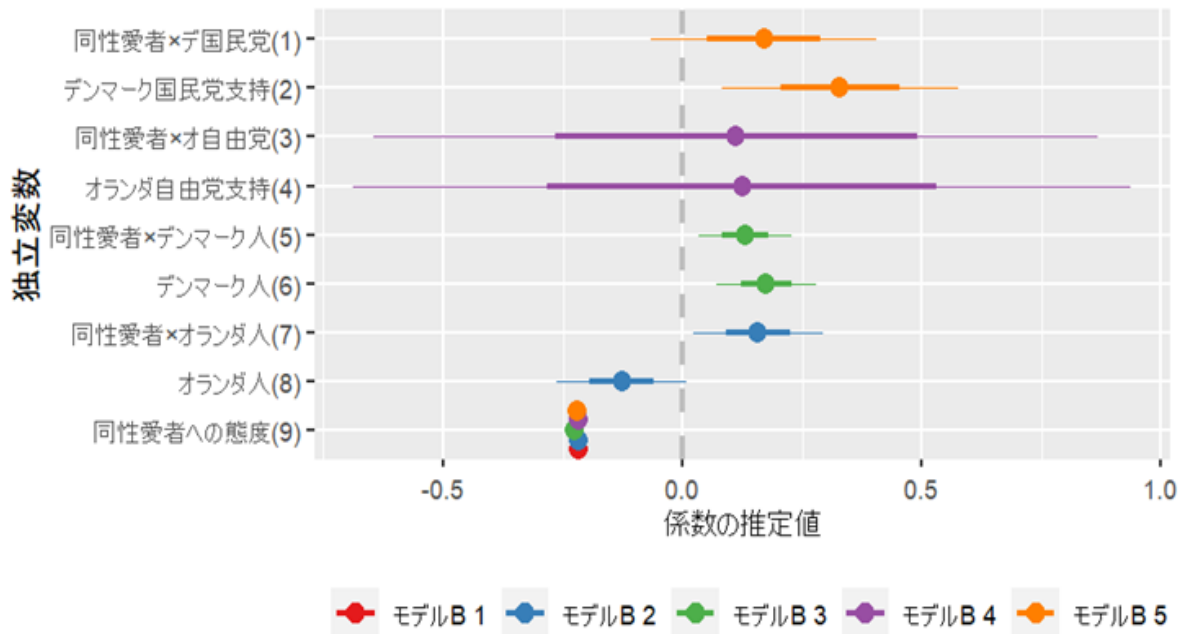


図3. 移民受け入れへの態度(オランダ・デンマーク)



VI. 結論と考察

本研究の目的はポピュリストが唱える「リベラル故の排外主義」の考え方が、有権者の間でも一般的であるのかという問いを実証分析にて検証することであった。「リベラル故の排外主義」のロジックは特にポピュリストに見られることから、ポピュリスト政党支持者において、より広く受け入れられる考え方であると予測した。しかし、一連の分析結果から見たのは「リベラル故の排外主義」はポピュリスト支持者よりも非ポピュリスト政党支持者によって広く受容された考え方であるということである。では、なぜ予想を裏切る結果が得られたのか、またこの結果は何を示唆しているのであろうか。

まずポピュリスト政党支持者が左右を問わず反移民的な傾向にあるのは、ポピュリズムという概念自体に由来するものである可能性が高い。ポピュリズムのマニ教（善悪二元論）的性格は「我々」に属さないものへの排外意識を常に抱えているものである。ポピュリスト政党支持者に関してもやはり、包摂性や寛容性、外集団の福祉と利益に関心を持たない傾向にあることが先行研究でも示されている(Baro 2022)。

このことを踏まえると、ポピュリスト政党支持者が同性愛者に寛容になることが表すのは次に示す 2 つのポピュリスト像であろう。1 つ目のポピュリスト像とは、寛容であることは性的マイノリティーにも宗教・民族的マイノリティーにも寛容であるということである。つまり、マイノリティーに寛容になることは「我々」つまり内集団の範疇の拡大を意味している。寛容の対象が拡大すれば、多種多様な主体に対して寛容になるということである。かなり常識的な結論に思えるが、本研究が想定していたポピュリスト像とは逆である。2 つ目のポピュリスト像は、「我々」側に包摂されるマイノリティーには寛容で、そうでないマイノリティーには不寛容であり、これは本研究が想定したポピュリスト像である。後者のポピュリスト像における「寛容さ」とは、あくまで限定的な「我々」を基準とする寛容さである。本研究の想定において「我々」とは「リベラルなヨーロッパ」であり、イスラームやムスリム移民は「我々」には含まれない。今回の分析結果から得られたのは 1 つ目のポピュリスト像である。ヨーロッパのポピュリスト支持者にとって、寛容になるということは「我々」という内集団の範囲の拡大を意味しているのであろう。

また、ポピュリストの言動とポピュリスト支持者の価値観とで、ズレが生じているのかもしれない。例えば、ウィルダースの支持者は彼のリベラルな主張よりも、反移民・反イスラーム的な主張により魅力を感じて彼を支持したのかもしれない。あるいは、「リベラル故の排外主義」のロジックは、政治家が自らの過激さを覆い隠すためのレトリックに過ぎないのかもしれない。排外主義をあくまでリベラルの立場から唱えることで、極右やネオナチと言った過激派というイメージによるレッテル張りを逃れようとしている可能性もある。¹⁶これらの考察は推測の域を出ない。ポピュリストのロジックとその支持者の価値観の間でどのような作用が働いているのか、その解答は本研究の分析からは実証的に導くことは難しい。

そして、本研究の分析結果において最も議論すべきは、なぜか非ポピュリスト政党支持者

に「リベラル故の排外主義」が確認されたことである。なぜ、ポピュリスト政党支持者ではなく、非ポピュリスト政党支持者が同性愛者に寛容になれば、反移民的な傾向を示すようになるのだろうか。欧州における排外主義的ポピュリズムの台頭の背景として挙げられるのは経済の停滞である。特に移民が増加した地域でこの傾向は顕著であり、移民増加しても経済が向上している地域ではポピュリスト支持の増加は見られない。また教育水準の低さもポピュリストの支持に寄与している(Rodríguez-Pose et al 2023)。つまり、移民増加によるポピュリスト台頭の背景としては、価値観よりも経済的要因がより強く作用していることが考えられる。

移民との価値観の衝突、すなわち本研究におけるリベラルなヨーロッパと非リベラルなイスラームが強調される前段階として、経済的な不安（それは、しばしば移民と既存政権の失敗が原因であると認識される）がポピュリスト支持の根底にある。「リベラル故の排外主義」による反移民の態度は価値観の衝突に根差すものであり、ポピュリスト支持者にはとっては反移民の要因としては二次的なものである可能性が高い。また、非ポピュリスト支持者はポピュリスト支持者よりも移民の流入による経済的ダメージが少ない。つまり、移民によって豊かさが蝕まれている実感がポピュリスト支持者よりも薄いと考えられる（反対にその実感を強く抱く者が、排外主義的ポピュリストの支持者になるだろう）。そうであるが故に、他の条件が同じであればポピュリスト支持者に比べて反移民的傾向が見られない。そして、非ポピュリスト支持者が反移民的傾向を示すときは、経済的要因ではなく価値観に根差すものとなる。

このことは、イングルハートの古典的な研究からも示唆される。先進国における経済的な豊かさと教育水準の高度化が、価値観の脱物質主義化を生み出した(イングルハート 1978: 358-360)。脱物質主義的な価値観において重要視されるのは、表現の自由や環境保護、人権尊重などのより抽象的な価値である。イングルハートの指摘を本研究の分析に敷衍すると、次のことが言えるだろう。高学歴な者や移民による経済的停滞を経験していない者は、その豊かさに支えられた脱物質主義的価値観を有する。彼らは抽象的な「価値観」を重視するので、移民との間に「価値観」の対立を見出した時に反移民的傾向を示す。一方の移民によって経済が停滞し、その犠牲になった(と認識する)者は、豊かさを失い物質主義的になるだろう。彼らにとって反移民の要因は経済の停滞である。もちろん前者より後者の方が排外主義的ポピュリストを支持する傾向にある。非ポピュリスト政党支持者に「リベラル故の排外主義」が確認されたのは、非ポピュリスト政党支持者は脱物質主義的な傾向があり、価値観を巡る争点の重要さがポピュリスト支持者よりも上位にくるからかもしれない。また、ポピュリスト政党支持者に「リベラル故の排外主義」が確認されなかったのは、彼らにとって移民とはリベラルな社会の敵などではなく、経済的に競合するライバルだからであろう。価値観の衝突は彼らにとっては贅沢なものなのである。

参考文献一覧

日本語文献

- ・イングルハート、ロナルド（三宅一郎、金丸輝夫、富沢克訳）（1978）『静かなる革命』、東洋経済新報社
- ・クラステフ、イワン（庄司克宏監訳）『アフター・ヨーロッパ——ポピュリズムという妖怪にどう向きあうか』、岩波書店
- ・庄司克宏（2018）『欧州ポピュリズム——EU分断は避けられるか』、ちくま新書
- ・田中拓道（2020）『リベラルとは何か 17世紀の自由主義思想から現代日本まで』、中公新書
- ・谷口将紀、水島治郎編（2018）『ポピュリズムの本質——「政治的疎外」を克服できるか』、中央公論新社
- ・テイラー、チャールズほか（佐々木毅、辻康夫、向山京一訳）（1996）『マルチカルチュラルリズム』、岩波書店
- ・プシェヴォスキー、アダム（吉田徹、伊崎直志訳）（2023）『民主主義の危機 比較分析が示す変容』、白水社
- ・フクヤマ、フランシス（会田弘継訳）（2023）『リベラリズムへの不満』、新潮社
- ・ベリー、ジェフリー M（松野弘監訳）（2009）『新しいリベラリズム——台頭する市民活動パワー——』、ミネルヴァ書房
- ・ポパー、カール（小河原誠訳）（2023a）『開かれた社会とその敵 第1巻 プラトンの呪縛（上）』、岩波文庫
- ・ポパー、カール（小河原誠訳）（2023b）『開かれた社会とその敵 第1巻 プラトンの呪縛（下）』、岩波文庫
- ・松谷満（2022）『ポピュリズムの政治社会学 有権者の支持と投票行動』、東京大学出版会
- ・ミュデ、カス、カルトワッセル・クリストバル・ロビラ（永井大輔、高山裕二訳）『ポピュリズム デモクラシーの友と敵』、東京大学出版会
- ・水島治郎（2016）『ポピュリズムとは何か 民主主義の敵か、改革の希望か』、中公新書
- ・水島治郎（2019）『反転する福祉国家——オランダモデルの光と影』、岩波書店
- ・水島次郎編（2020）『ポピュリズムという挑戦——岐路に立つ現代デモクラシー』、岩波書店
- ・吉崎祥司（1998）『リベラリズム〈個の自由〉の岐路』、青木書店
- ・ヨプケ、クリスチャン（伊藤豊、長谷川一年、竹島博之訳）（2015）『ヴェール論争 リベラリズムの試練』、法政大学出版局
- ・渡辺博昭編（2023）『ポピュリズム、ナショナリズムと現代政治 デモクラシーを巡る攻防を読み解く』、ナカニシヤ出版

英語文献

- ・ Alvi, Shahid, and Zaidi, Arshia(2021)““My Existence is not Haram”: Intersectional Lives in LGBTQ Muslims Living in Canada.” *Journal of Homosexuality*,68(6) :993-1014.
- ・ Baro, Elena. (2022). “Personal Values Priorities and Support for Populism in Europe—An Analysis of Personal Motivations Underpinning Support for Populist Parties in Europe.” *Political Psychology* 43(6) :1191-1215.
- ・ Breidahl, Karen N. Holtug, Nils, and Kongshøj, Kristian. (2017). “Do shared values promote social cohesion? If so, which? Evidence from Denmark.” *European Political Science Review*, 10(1): 97–118.
- ・ Heinisch, Reinhard, and Wegscheider, Carsten. (2020)“Disentangling How Populism and Radical Host Ideologies Shape Citizens’ Conceptions of Democratic Decision-Making.” *Politics and Governance*, 8(3): 32–44.
- ・ Juon, Andreas, and Bochsler, Daniel. (2020)“Hurricane or fresh breeze? Disentangling the populist effect on the quality of democracy.” *European Political Science Review*,12: 391–408.
- ・ Rahman Momin. (2016)“Challenging the opposition of LGBT identities and Muslim cultures: initial research on the experiences of LGBT Muslims in Canada.” *Theology & Sexuality*,22(1-2):73-88.
- ・ Rodríguez-Pose, Andrés. Terrero-Dávila, Javier, and Lee, Neil. (2023) “Left-behind versus unequal places: interpersonal inequality, economic decline and the rise of populism in the USA and Europe.” *Journal of Economic Geography*, 23(5): 951–97.
- ・ Shah, Shanon. (2016).“Constructing an alternative pedagogy of Islam: the experiences of lesbian, gay, bisexual and transgender Muslims.” *Journal of Beliefs & Values*, 37(3): 308–319.
- ・ Siraj, Asifa. (2012). ““I Don’t Want to Taint the Name of Islam”: The Influence of Religion on the Lives of Muslim Lesbians.” *Journal of Lesbian Studies*,16(4): 449-467.

インターネット文献

日本語文献

- ・ 飯山陽 (2022)「疾風怒濤のイスラム世界」、『Newsweek』 2022年7月12日
https://www.newsweekjapan.jp/iiyama/2022/07/post-30_1.php(2023/12/14 最終アクセス)
- ・ ラックマン、ギデオン (2023)「欧州主流派に食い込む極右政党、オランダでも第一党になった衝撃」、『Financial Times』 2023年11月30日 <https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/78177?page=4> (2023/12/17 最終アクセス)
- ・ 「オランダ総選挙、反イスラム掲げる極右政党が勝利 連立成立が焦点」『BCC NEWS JAPAN』.2023年3月10日 [https://www.bbc.com/japanese/67516815/\(2023/12/13](https://www.bbc.com/japanese/67516815/(2023/12/13) 最終

アクセス)

英語文献

・“What to Know About Geert Wilders, the 'Dutch Trump'”. *Time*.2017 年 3 月 10 日.
<https://time.com/4696459/geert-wilders-the-dutch-trump>(2023/12/13 最終アクセス)

付録資料 回帰分析の結果

表1.宗教と同性愛者への態度

	ムスリム	カトリック	プロテスタント	その他のキリスト教徒	ユダヤ教徒	無宗教
ISCED	0.087*** (0.004)	0.098*** (0.004)	0.074*** (0.004)	0.100*** (0.004)	0.093*** (0.004)	0.069*** (0.004)
年齢	-0.010*** (0.000)	-0.009*** (0.000)	-0.010*** (0.000)	-0.009*** (0.000)	-0.009*** (0.000)	-0.015*** (0.000)
女性ダミー	0.120*** (0.014)	0.122*** (0.015)	0.139*** (0.014)	0.122*** (0.014)	0.128*** (0.015)	0.213*** (0.013)
無宗教						0.629*** (0.013)
ユダヤ教徒					0.578** (0.188)	
その他のキリスト教徒				-0.789*** (0.018)		
プロテスタント			0.647*** (0.018)			
カトリック		0.155*** (0.015)				
ムスリム	-0.567*** (0.035)					
Num.Obs.	27954	27954	27954	27954	27954	46794
R2	0.053	0.048	0.088	0.107	0.045	0.112
R2 Adj.	0.053	0.048	0.088	0.107	0.045	0.112
AIC	89514.5	89661.4	88467.8	87876.2	89764.5	161983.0
BIC	89563.9	89710.9	88517.3	87925.6	89813.9	162035.5
Log.Lik.	-44751.256	-44824.716	-44227.910	-43932.094	-44876.244	-80985.514
RMSE	1.20	1.20	1.18	1.16	1.20	1.37

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

表2.移民受け入れに対する態度

	モデルA1	モデルA2	モデルA3	モデルA4	モデルA5
ISCED	-0.067*** (0.005)	-0.061*** (0.005)	-0.066*** (0.005)	-0.066*** (0.005)	-0.061*** (0.005)
年齢	0.003*** (0.001)	0.003*** (0.001)	0.003*** (0.001)	0.003*** (0.001)	0.003*** (0.001)
女性ダミー	0.024 (0.017)	0.036* (0.018)	0.029 (0.018)	0.029 (0.018)	0.036* (0.018)
ムスリム	-0.241*** (0.052)	-0.194*** (0.052)	-0.212*** (0.053)	-0.212*** (0.053)	-0.194*** (0.052)
同性愛者への態度	-0.218*** (0.007)	-0.230*** (0.008)	-0.206*** (0.009)	-0.233*** (0.015)	-0.133*** (0.021)
右派ポピュリスト支持		0.378*** (0.025)			
左派ポピュリスト支持			0.126*** (0.022)		
右派支持				-0.126*** (0.022)	
左派支持					-0.378*** (0.025)
同性愛×右派ポピ		0.097*** (0.022)			
同性愛×左派ポピ			-0.027 (0.017)		
同性愛×右派				0.027 (0.017)	
同性愛×左派					-0.097*** (0.022)
Num.Obs.	15956	15459	15459	15459	15459
R2	0.082	0.096	0.085	0.085	0.096
R2 Adj.	0.081	0.096	0.085	0.085	0.096
AIC	48220.1	46428.9	46617.8	46617.8	46428.9
BIC	48273.9	46497.7	46686.6	46686.6	46497.7
Log.Lik.	-24103.056	-23205.450	-23299.908	-23299.908	-23205.450
F	283.446	235.199	205.532	205.532	235.199
RMSE	1.10	1.09	1.09	1.09	1.09

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

表3.移民受け入れへの態度(オランダ・デンマーク)

	モデルB1	モデルB2	モデルB3	モデルB4	モデルB5
ISCED	-0.067*** (0.005)	-0.067*** (0.005)	-0.068*** (0.005)	-0.067*** (0.005)	-0.067*** (0.005)
年齢	0.003*** (0.001)	0.003*** (0.001)	0.003*** (0.001)	0.003*** (0.001)	0.003*** (0.001)
女性ダミー	0.024 (0.017)	0.024 (0.017)	0.027 (0.017)	0.024 (0.017)	0.026 (0.017)
ムスリム	-0.241*** (0.052)	-0.238*** (0.052)	-0.240*** (0.052)	-0.241*** (0.052)	-0.239*** (0.052)
同性愛者への態度	-0.218*** (0.007)	-0.219*** (0.007)	-0.226*** (0.007)	-0.218*** (0.007)	-0.219*** (0.007)
オランダ自由党支持				0.124 (0.406)	
デンマーク国民党支持					0.329** (0.123)
オランダ人		-0.127+ (0.067)			
デンマーク人			0.174*** (0.052)		
同性愛者×オ自由党				0.111 (0.378)	
同性愛者×デ国民党					0.170 (0.118)
同性愛者×オランダ人		0.158* (0.068)			
同性愛者×デンマーク人			0.131** (0.049)		
Num.Obs.	15956	15956	15956	15956	15956
R2	0.082	0.082	0.084	0.082	0.083
R2 Adj.	0.081	0.082	0.084	0.081	0.082
AIC	48220.1	48218.0	48180.5	48223.7	48207.8
BIC	48273.9	48287.1	48249.6	48292.8	48276.9
Log.Lik.	-24103.056	-24100.000	-24081.251	-24102.869	-24094.884
F	283.446	203.386	209.226	202.494	204.979
RMSE	1.10	1.10	1.09	1.10	1.10

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

¹ ポパー曰く、不寛容による寛容の蹂躪を防ぐには必要な限りにおいて不寛容なものを力づくで抑制する権利を認める必要があるとする。しかし、その前段階で世論による掣肘や合理的な論証によって不寛容さに立ち向かうべきであると主張する。この過程を飛ばして力による抑制を行使することは最も非合理的である(ポパー 2023b:258)。

もっともムスリムと見るなりテロリスト予備軍と見做したり、社会からのイスラームの完全排除を訴えたりする排外主義は、果たして十分に合理的な手段を取り得るのかは疑問である。

² 2023年度のオランダ下院総選挙でのウィルダースは、排外主義的姿勢は変わらないが過激さは抑えぎみである。モスクの廃止やイスラーム教の学校の即時閉鎖は一旦棚上げすると用意があるとしている。また、過激さを抑えたことが、得票数の伸長に寄与した可能性が高い(『BCC NEWS JAPAN』2023.11.24)。

³ 必ずしもこういった解釈は正しいとは限らず、クルアーンでは同性愛を禁じていないとの見方もある。また、イスラームの枠組みからジェンダー平等や性の多様性受け入れる試みもある(Shah 2016)。

イスラームが同性愛者へ不寛容であるのは、結婚制度の外の性行為をハラーム(禁止)としているためである。よって異性間結婚が前提となる社会では同性間の性行為は禁じられる(Alvi and Arshia 2021)。したがって、宗教の教えそのものよりも、社会のコンセンサスが同性愛を恥ずべきものとしている。このように、同性愛への不寛容さの根源は宗教そのものではなく、文化や社会の習慣であるという指摘もある(Siraj 2012)。ムスリムやイスラームの教えそのものを不寛容であると断じることは適切ではない。

⁴ このような指摘は本研究がテーマにしているリベラルについて考える上でも非常に興味深い指摘である。

チャールズ・テイラーによるとリベラルが要求する普遍主義は、それ自体が特殊な立場であるとされる。リベラルは中立性や平等を標榜するからこそ差異を考慮しない。しかし、その中立性や普遍性というのは、西洋における文化的伝統の中で見いだされた特殊な立場であるともいえる(テイラーら 1996:61-62)。普遍性のもとで特殊性が排除されるのであれば、それは西洋文化という多数派による専制にほかならない。リベラルが要求する真の普遍性は、特殊性を通じ、特殊性を包含することによって成立する。差異の承認こそが真の普遍主義である(吉崎 1998:119-125)。

このことを踏まえると、イスラーム諸国やヨーロッパの中のイスラームにリベラルな寛容さを強いることは、「特殊な普遍性」の押し付けにほかない。しかし、イスラーム社会の同性愛者への不寛容さなどの問題点を放置すれば寛容のパラドックスに直面する。このパラドックスは、互いのアイデンティティの承認を通じて実現する多文化主義によって相克するしかないであろう。(そして、多くのポピュリストはその試みは失敗に終わったと

主張し、移民に寛容な政策を主導してきた EU や既存政権を批判する(庄司 2018:33。)

⁵ データ、変数、分析方法は4章にて詳述する。

⁶ 詳しい統計的記述は末尾の表1にて。

⁷ ESSにおける質問は以下の通りである。「Gays and lesbians free to live life as they wish」。回答者は1～5の5段階評価で回答し、数値が小さいほど同性愛者に寛容になる。本研究では、分析結果の解釈を容易にするために回答の値を逆転させており、数値が大きくなれば同性愛者に寛容になる。

⁸ サリヴァンによればリベラル派は確かに今日おけるマイノリティーの社会的地位の向上に貢献した。しかし、同書の中でリベラル派の問題点も多く指摘されている。

⁹ ESS9における質問は以下の通りである。「Allow many/few immigrants from poorer countries outside Europe」。回答者は1～4の4段階評価で回答し、数値が大きいほど移民に対して否定的である。

¹⁰ ESS9では前回選挙で投票した政党の回答が含まれる。回答した政党をGPSデータセットに基づき分類する。

¹¹ GPSでは、ポピュリズム的傾向とイデオロギーをそれぞれ4段階で評価している。

ポピュリズム的傾向は政党のレトリックが多元的主義的であるか、ポピュリスト的であるかにより分類される。1 強い多元的主義(Strongly Pluralist)、2 ほどほどに多元的主義(Moderately Pluralist)、3 ほどほどにポピュリスト(Moderately Populist)、4 強いポピュリスト(Strongly Populist)の4段階で識別される。本稿では1と2を非ポピュリスト、3と4をポピュリストとするバイナリー変数として扱う。

イデオロギーは政党の経済的価値観が国家より(左派)であるか、市場より(右派)であるかにより分類される。また、社会的価値観がリベラルであるか、保守的であるかで分類される。以上を組み合わせることで政党のイデオロギーを構成する。1 リベラル左派(Left-Liberal)、2 保守的左派(Left-Conservative)、3 リベラル右派(Right-Liberal)、4 保守的右派(Right-Conservative)の4段階で識別される。ポピュリズム的傾向と同じく1と2を左派、3と4を右派とするバイナリー変数に変換し分析に導入する。

¹² いずれもESS9の回答を用いる。

¹³ 詳しい統計的記述は末尾の表2にて。

¹⁴ 本研究では推測統計学の伝統に従い1%または5%水準で統計的に有意か否かを判断している。

¹⁵ 詳しい統計的記述は末尾の表3にて。

¹⁶ GPSのイデオロギー評価によるとオランダ自由党は2(保守的左派)である。GPSに基づくと、ウィルダースと自由党は極右であるとは言いづらい。

なお、日本語の様々な記事やコラムではウィルダースや自由党を「極右」としている(例えば、ラックマン 2023、『BCC NEWS JAPAN』2023.11.24)。おそらくウィルダースの排

外主義的な性格を極右的であると捉えているのだろう。しかし、本文でも扱ったようにウィルダースはリベラルの立場も擁護している。また、GPS の評価も彼を右派的と見做していない。このことから、近年のヨーロッパ政治における排外主義や移民嫌悪をすべて極右的であるとみなすのは早計であり、排外主義やポピュリズムの本質を見落とす危険性があることを指摘したい。